

「国語で考えをもつ・考えを深める」とは？

新学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等の育成が重視され、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」のすべての領域において、「考えの形成」に関する指導事項が位置づけられています。小学校国語科においてポイントとなる「考えの形成」の指導とは？国語で考えをもつ・考えを深めるとは何でしょうか？東京学芸大学の中村和弘先生に伺います。



東京学芸大学 准教授 **中村 和弘** (なかむら かずひろ)
愛知県生まれ。川崎市内の公立小学校教諭、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭を経て、現職。専門は国語科教育学。中央教育審議会「国語ワーキンググループ」委員、「言語能力の向上に関する特別チーム」委員。小学校学習指導要領解説国語編の作成協力者として、学習指導要領の改訂に携わる。

書いて考える、考えながら書く。言葉で思考する国語の時間を大切に。(Photo:東京学芸大学附属小金井小学校1年)

「考えの形成」の授業づくりとは？

国語の授業で、言葉を使って考えをまとめたり、深めたりするとは、どういうことでしょうか。

たとえば、「書くこと」の指導でいえば、「書きながら考える」「考えながら書く」というように、「書く」能力と「考える・判断する」能力を同時に育てていくことだと思います。

私は最近、現場の先生方に「子どもが頭をフル回転させて考える国語授業、『考える』ことをベースにした授業にしましょう!」とお話しています。子どもが高性能の「考えるエンジン」を持っているのに、授業中、そのエンジンが生かされていないということに思い当たりにませんか。

「書くこと」でいえば、「まず何をやって」「次に何を書いて」というように、教科書に合わせて指導してあげば、確かに書けるようになります。手順にしたがえば、ある程度できる。だから、**順を追って指導すること**で、書かせたつもりになってしまいうけれど、実は**そうした授業の進め方では、考え**ていないし、**学びになっていないのかも**しれません。

書く過程で、「どうやって書くのかな」とか、「いままでの書き方には何が良かったかな」とか、「何をどうやって取材しよう」といったように、方法と内容の両方から、もつと考えさせるへ負荷をかけないといけないのではないかと思います。

もちろんいい意味での負荷ですが、子どもに負荷をかけて「考えさせる」ことが必要です。教科書の例文にあるような文章を書きあげることだけを目的とするのではなく、作文に取り組むそのプロセスで、たくさん「考える」ことをさせたいと思います。

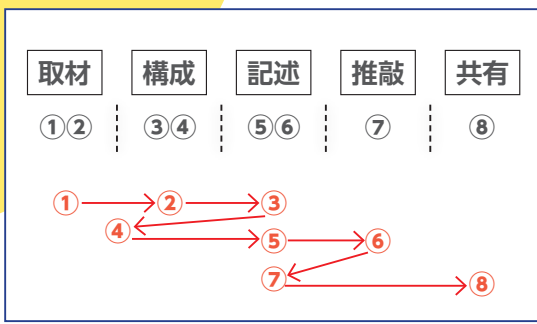
頭をフル回転させて「うんと考える」

「考える」授業づくりは国語に限りませんが、国語は他教科に比べてとくに低学年、中学年の授業時数が潤沢ですから、**試行錯誤しながら考え合う**という学習がしやすいはずですよ。

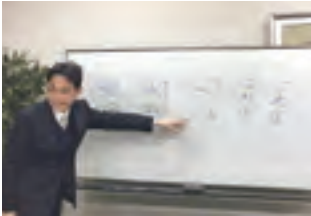
他教科では、ある程度限られた時間の中で、「ここまでできるようにする」というステップが教科書で区切られている場合もありますが、**国語は学習過程が工夫しやすいので、考えるための時間が取りやすい**と思います。

たとえば「スイミー」という教材があつて、こういうことを学ぼうという目標はあるけれど、場面の様子をくわしく読むにはどうやっていこうか、と考える幅をもたせることができます。「1年のときにこういうふうをやったから、同じようにやってみよう」とか、「この時間はグループで別々でやりたい」というように、学習の過程にある程度

の自由が利くわけです。国語でそういった学び方を積み重ねていくと、たとえば社会の調べ学習の発表のときにも「ぼくは新聞にまとめた」とか、「私たちはグループプレゼンにしよう」というように、学習自体を選択していくことにもつながるので



8時間の授業を①～⑧と順に単線型で進むのではなく、短く取材⇒構成⇒記述と進んで、また取材、構成に戻るという具合に、行きつ戻りつ(①～⑧)しながらジグザグに進むことで、子どもが主体的に考えるようになる。



はないかと思えます。

小学校段階の原体験として、「立派なものを書いてうれしい」「上手にスピーチできてうれしい」という経験も大切ですが、合わせて、「試行錯誤する」「選択する」「判断する」といったプロセスを大切にしていきたいと思えます。

国語でこそ試行錯誤を

教育実習生を見ていても感じますが、知識を与える授業はできても、この考えさせる授業というのはなかなかできません。

「子どもと一緒に試行錯誤しながら、ゴールとなる力をつけつつ、そのプロセスでいろいろなことを学ばせるのが学校教育育だから」と指導するのですが、きれいに教えることの心地よさを感じてしまうと、子どもと一緒に回り道をしたり考えたりする教え方ができないのです。たとえば文章を書かせるために、取材↓構成↓記述と段階を踏んで、一直線(単線型)の指導をしがち

ですが、子どもに考えさせるためには、行ったり来たりする授業が必要です。

そのために、書く分量を少なくしたり、テーマも易しいものにしたりに、時間も短い時間で取材・構成して、まずは一度書かせてみる。すると、子どもは書きながら、「ここが足りない」「ここはもう少し取材したい」と考え始めます。ベテランの先生方は、こうした行ったり来たりするジグザグ型の授業をすることで、子どもに主体的に考えさせています。けれども、若い先生方にはそのノウハウがなかなか伝わっていないと感じます。

単線型の授業のほうが指導しやすいし、途中で戻したら、何がどうなってしまうかわからないという心配もあると思います。脱線する子もいるかもしれません。でも考えさせるといことは、そういうへ余白を大事にすることだと思えます。低学年に国語の授業が多くなっているのは、そういう試行錯誤をするためだとも言えるのではないのでしょうか。

書くことは考えること

国語に限らず、書くことは考えを深めます。算数でも考え方を言語化する

ことで学びが深まるし、理科のノートづくりでも書きながら考えるはずですよ。実験自体は楽しくやるけれど、それをどのように記述するかで、実験の意味づけや学びの深まりは当然変わってきます。

また、書くことといえば、振り返りの書かせ方に困っているとよく聞きます。授業の感想が形式的になつて、「楽しかったです」「またやりたいです」で終わってしまうというのです。

子どもは振り返る必然性がないと書けません。「附属の子どもはよく書けますね」と言われますが、書く必要性が実感できる課題や活動だからこそ書くのです。

先生方の授業を参観すると、振り返りに向けて目的や意図を子どもたちと共有するような布石がきちんと打つてある。必要のある場、目的、意味を子どもたちが実感できるからこそ書けるのではないのでしょうか。

「国語で考える」を、主に書くことを例にお話ししました。「国語で考える」「言葉で思考すること」は、さまざまな授業の工夫につながりそうですね。